夏目漱石
名は金之助。文學博士。大正五年歿、年五十。

二　松原

夏目漱石

さつきから松原を通つてゐるんだが、松原といふものは、繪で見たよりもよつ程長いもんだ。何時迄行つても松ばかり生えて居て、一向要領を得ない。此方がいくら歩いたつて、松の方で發展して呉れなければ駄目な事だ。いつそ始から突立つた儘、松と睨めつこをしてゐる方が増しだ。

東京を立つたのは昨夕の九時頃で、夜通し無茶苦茶に北の方へ

歩いて來たら、草臥れて眠くなつた。泊る宿もなし、金もないから、暗闇の神樂堂へ上つて一寸寐た。何でも八幡樣らしい。寒くて目が覺めたら、まだ夜は明け離れて居なかつた。夫からのべつ平押しに此處迄遣つて來た樣なものの、かう矢鱈に松ばかり並んで居ては歩く精がない。

足は大分重くなつて居る。膨ら脛に小さい鐵の才槌を縛り附けた樣に、足搔に骨が折れる。袷の尻は無論端折つてある。其の上洋袴下さへ穿いて居ないのだから不斷なら競走でも出來るが、かう松ばかりぢや所詮かなはない。

掛茶屋がある。葭簀の蔭から見ると、粘土の竈に錆びた茶釜が掛つて居る。床几が二尺ばかり往來へ食み出した上から、二三足草鞋がぶら下つて、半纏だか、褞袍だか分らない着物を着た男が、背中を此方へ向けて腰を掛けてゐる。

休まうかな、廢さうかなと、通り掛りに横目で覗き込んで見たら、例の半纏と褞袍の中を行く男が、突然此方を向いた。煙草の脂で黑くなつた齒を厚い唇の間から出して笑つてゐる。是はと少し氣味が惡くなりかゝる途端に、向の顏は急に眞面目になつた。今迄茶店の婆さんとさる面白い話をして居て、何の氣もつかずに、つい其の儘の顏を往來へ向けた時に、不圖自分の面相に出喰はしたものと見える。どもかく向が眞面目になつたので、漸く安心した。安心したと思ふ間もなく、又氣味が惡くなつた。男は眞面目になつた顏を眞面目な場所に据ゑた儘、白眼の運動が氣に掛る程の勢で、自分の口から鼻、鼻から額と、ぢり〳〵頭の上へ登つて行く。鳥打帽の廂を跨いで、腦天迄居いたと思ふ頃、又白眼がぢり〳〵下へ降つて來た。今度は顏を素通りにして胸から臍のあたり迄來ると、一寸留つた。臍の所には蟇口がある。三十二錢這入つてゐる。白い眼は久留米絣の

上から此の臺口を覗つた儘、木綿の兵兒帶を乘越してやつと空壓へ來た。いくら見たつて、見られる樣なものは食つ附いちや居ない。たゞ不斷より少々重たくなつてゐる。白い眼は其の重たくなつて居る所を、わざとぢり〳〵見て、どう〳〵親指の痕が黑く附いた組下駄の臺迄降つて行つた。

かう書くと、何だか長く一所に立つてゐて、さあ御覽下さいと云はないばかりに振舞つた樣に思はれるが、さうぢやない。實は白い眼の運動が始るや否や、急に茶店に休むのが厭になつたから、すたすた歩き出した積りである。にも拘らず、此の積りが少々覺束なかつたと見えて、自分が親指にまむしを拵へて、組下駄を捩ぢる間際には、もう白い眼の運動は濟んでゐた。殘念ながら向は早いものである。ぢり〳〵見るんだから、定めし手間が掛るだらうと思つたら大間違ひ。ぢり〳〵には相違ない。何處迄も落附いてゐるが、それで

滅法早い。茶屋の前を通り越しながら、世の中には妙な作用を持つてゐる眼があるものだと思つた位である。それにしても、あゝ緩くり見られないうちに、早く向き直る工夫はなかつたもんだらうか。さんざつ腹冷かされて、さあ御歸り、用はないからと云ふ段になつて、もう御免蒙りますと立上つた樣なものだ。此方は馬鹿氣て居る。彼方は得意である。

歩き出してから五六間の間は、變に腹が立つた。併し不愉快は五六間ですぐ消えて了つた。と思ふと、又足が重くなつた。何しろ鐵の才槌を雙方の足へ縛り附けて歩いてゐるんだから、敏活な行動は出來ない筈だ。あの白い眼にぢり〳〵遣られたのも、萬更持前の半間からばかり來たとも云へまい。かう思ひ直して見ると下らない。

其の上こんな事を氣にして居られる身分ぢやない。一旦飛出したからには、もうどうあつても家へ戻る了簡はない。東京にさへ居

り切れない身體だ。たとひ田舍でも落附く氣はない。休むと後から追つ掛けられる。昨日迄のいさくさが頭の中を切つて廻つた日には、どんな田舍だつて遣りきれない。だから只歩くのである。けれども別段に目的もない歩き方だから、顏の先一間四方がぼうとして、何だか燒損なつた寫眞の樣に曇つてゐる。しかも此の曇つたものが、いつ晴れると云ふ當もなく、唯漠然と際限もなく行手に廣がつてゐる。苟も自分が生きてゐる間は、五十年でも六十年でも、いくら歩いても駈けても、依然として廣がつてゐるに違ひない。あゝ、詰らない。歩くのは居たゝまれないから歩くので、此のぼんやりした前途を拔けだすために歩くのではない。拔けださうとしたつて拔けだせないのは知れ切つてゐる。

東京を立つた昨夜の九時から、かう諦めはつけては居るが、さて歩き出して見ると、歩きながら氣が氣でない。足も重い。松が厭きる程行列して居る。併し足よりも松よりも腹の中が一番苦しい。何のために歩いて居るんだか分らなくつて、しかも歩かなくつては一刻も生きて居られない程の苦痛は滅多にない。

のみならず、歩けば歩く程到底拔ける事の出來ない、曇つた世界の中へ段々深く潛り込んで行く樣な氣がする。振返ると、日の照つてゐる東京はもう代が違つて居る。手を出しても足を伸ばしても、此の世では屆かない。凡て娑婆が違ふ。其の癖暖かな朗かな東京は、依然として眼先にあり〳〵と映つて居る。おういと日蔭から呼びたくなる位明らかに見える。と同時に、足の向いてゐる先は漠々たるものだ。此の漠々のうちへ——命のあらんかぎり廣がつてゐる此の漠々のうちへ——自分はふら〳〵迷ひ込むのだから心細い。

此の曇つた世界が曇つたなりはびこつて、定業の盡きる迄行く手を塞いで居てはたまらない。留つた片足を不安の念に驅られて

一歩前へ出すと、一歩不安の中へ踏込んだ譯になる。不安に追懸けられ、不安に引つ張られて、已むを得ず動いては、いくら歩いてもいくら歩いても埒があく筈がない。生涯片附かない不安の中を歩いて行くのだ。どてもの事に、曇つたものが一層段々暗くなつて呉れればいゝ。暗くなつた所を又暗い方へと踏出して行つたら、遠からず世界が闇になつて、自分の眼で自分の身體が見えなくなるだらう。さうなれば氣樂なものだ。

意地の悪い事に、自分の行く路は明るくもなつて呉れず、と云つて暗くもなつて呉れない。どこ迄も半陰半晴の姿で、どこ迄も片附かぬ不安が立て罩めて居る。是では生甲斐がない。されば、と云つて死に切れない。何でも人の居ない所へ行つて、たつた一人で住んで居たい。

唯暗い所へ行きたい、行かなくつちやならないと思ひながら、雲を攫む樣な了簡で歩いて來ると、後からおい〳〵呼ぶものがある。どんなに魂がうろついてゐる時でも、呼ばれて見ると性根があるのは不思議なものだ。自分は何の氣もなく振向いた。應ずるためといふ意識さへ持たなかつたのは事實である。併し振向いて見て、始めて氣が附いた。自分は先の茶店から未だ二十間とは離れて居ない。其の茶店の前の往來へ、例の半纏と褞袍の合の子が出て、脂だらけの齒をあらはに曝しながら、頻りに自分を呼んでゐる。

昨夕東京を立つてから、まだ人間に口を利いた事がない。人から言葉を掛けられようなどとは夢にも豫期して居なかつた。言葉を掛けられる資格などは丸で無いものと、自信し切つて居た。所へ突然呼びかけられたのだから、――粗末な齒並びだが、むき出しに笑顔を見せて、頻りに手招きをして居るのだから、ぼんやり振返つた時の心持が自然と判然とすると共に、自分の足は何時の間にか、其の

尾崎紅葉
名は徳太郎。文學者。明治三十六年歿、年三十七。

男の方へ動き出した。（坑夫）